

十勝岳

○大正火口の表面温度分布

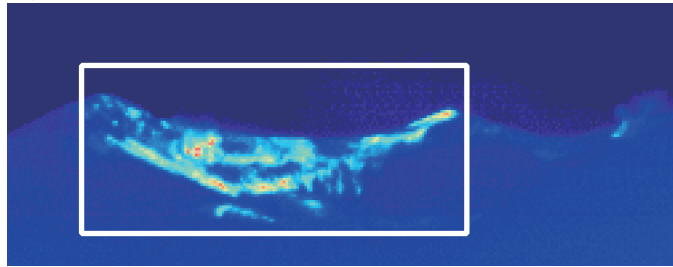
大正火口および62-I火口周辺の表面温度分布は、2010年以降の観測結果と比較して、きわだつた変化は認められない。

大正火口壁北側上部（図に向かって左側）の領域では熱異常域が縮小しているように見えるが、これは噴気に覆われた領域である。また、表示した温度スケールでは62-I火口壁（図に向かって右側）の熱異常域が不明瞭で、62火口周辺の熱活動は低下しているのかもしれない。

表面温度から推定した放熱量は、2010年に較べて増加を示した。噴気に覆われた領域のあることを考慮すると放熱量は更に増加することになるが、この領域が全体に占める割合は小さく、この影響は小さいと考えられる。全体として放熱量の増加傾向はあるものの有意なものとは言えない。

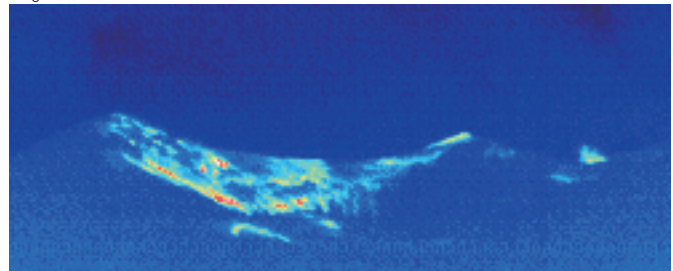
なおSO<sub>2</sub>放出量の遠隔測定を行ったが、シグナルは検出されなかった。

$\epsilon_0$  : 1.0 外気温 : 9.8°C 2013年9月12日06時16分



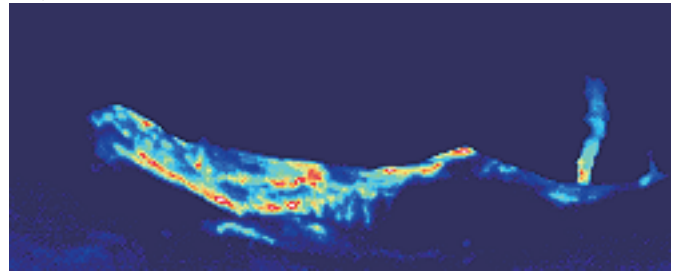
10 15 20 25

$\epsilon_0$  : 1.0 外気温 : 19.8°C 2010年8月31日04時11分



16 18 20 22 24 26

$\epsilon_0$  : 1.0 外気温 : 9°C 2009年8月26日04時52分



5 10 15 20

図1. 大正火口の表面温度分布. 外気温は観測点（望岳台）の値. 白枠は放熱量を見積もった領域を示す.

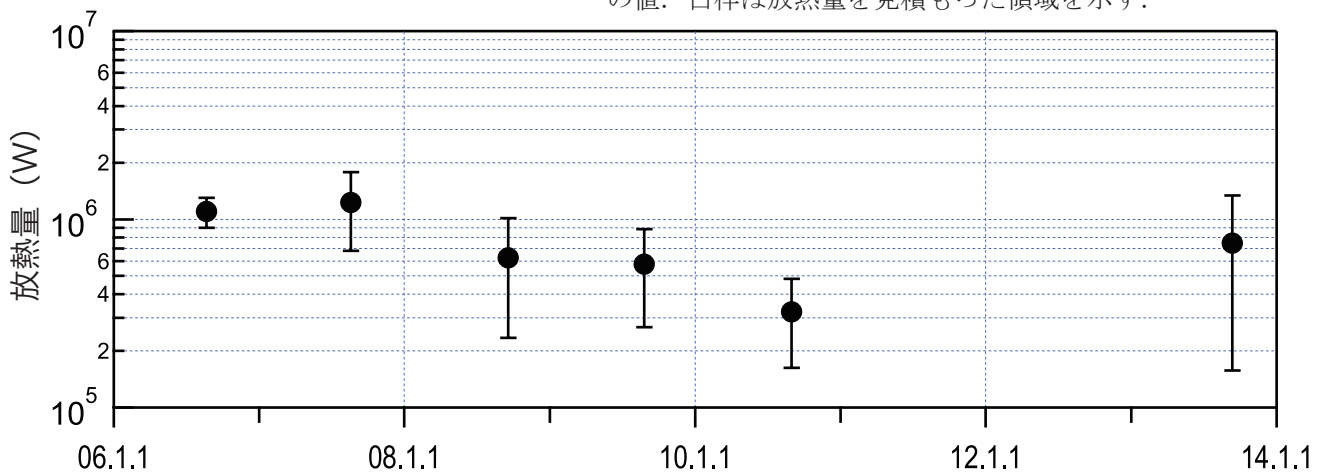


図2. 大正火口からの放熱量の経年変化.